

「水曜サロン with 赤堀会長」第4期 第11回（通算56回）

NEXTGIGAに向けた学校現場の今とこれから

～教員・行政・事業者・研究者に向けた小学校教員からメッセージ

1. 内容

I First-GIGAへ 活用推進の歩みとエピソード

- (1) ICT活用推進－授業者として&情報主任として
- (2) プログラミング教育－校内・市内共通カリキュラム
- (3) コロナを乗り越えたオンライン授業

II Next-GIGAへ 国策としてのGIGAを形に

- (1) GIGAに関わるステークホルダー
- (2) 「想像力」と「対話」
- (3) 自分ができること 自分にしかできないこと

2. 所感

本日は、現場の先生の努力を改めて実感したのと、周りの我々はもっと協力できるのではないかと、そんな想いをもった1時間でした。「津下先生だからできるんでしょう」と言われて、ある時から、開き直って、自分だからできる事は確かにある、自分だからできることをやっという、となったこのことです。今日のキーワードは「自分だからできることをやっという」。

津下先生の学校で、全学年、全教室で活用するようになったのは、5年目とのこと。研修しても使えるようにならない、日常的な活動に行くために何をするか、5年経って、全学年で活用しているのは、デジタルドリル。理由は、子どもが勝手に使うから。ツールを用いた協働的学びは20%程度、家庭持ち帰り40%、遠隔授業20%。協働的な学びで活用するには時間がかかることを実感。これを前面に出しすぎると、先生方がついてこれない、やりやすいところからやる。現場の課題の一つは、環境の壁。予備機の有無、修理のフローの難しさ、教員端末子どもの端末と同じものであるか否か、活用の仕組みづくり、そして基礎知識の有無。「不具合の対応が難しくてもよい」、「タブレットの活用に展望があるように思えない」という先生方の声もでている。そして、とにかく現場は忙しい、そこを理解して進めてほしいとの想いをいただきました。

本日参加された想いのある皆様へのメッセージは、繰り返しになりますが、「自分だからできることがある、全員の先生が使う様にならなくても、隣の先生が使えるようになることは支援できるのではないかと。ぜひ、やってほしい！」でした。

質疑、意見交換では、格差を何とかしたい、ICTは探求と相性が高い、協働的な学びが壁で、それは、先生方の教育観の相違からくるところだが、簡単にできることはないかなど。まずは子どもたちが写真をとって見せ合うぐらいから始めるのはどうでしょうとのこと。危機対策が過剰になってきており、心配する人への対応にはどうすればよいか、それは、行政の仕事で、現場から声を上げるこ

と。津下先生のアドバイスに従うと、私ができることは、「これからを生きる子どもたちには必要なことなのだから、先生が多大な努力と苦勞で、普及を5年10年と待つことではない、まずは子どもたちが勝手に使えるシーンを提供しよう、その活用事例を先生に広めましょう。そのKPIを掲げて、モニタリングしていきましょう」でしょうか。津下先生、現場のリアルをお話いただき、大きなヒントをいただきまして本当にありがとうございました。

以上